精神遅滞学齢児の現症と初期運動発達との関連についての調査研究

北九州市立総合療育センター
久　田　信　行
北九州市立養護教育センター
中　西　　正

目　的

前年度の研究の一つの結果として，発達障害児では，初期の運動発達に遅滞を示す群と遅滞を示さない群に大別され，行動に異常を示す障害児はおおむね後者に含まれるであろうことが示唆された。このことについてのより一層の分析のため今年度から本研究が開始された。

本研究においては，すでに病態像が確立された学齢の精神遅滞児を対象とし，その現在の状態像を分析するとともに，彼らの初期運動発達の遡及調査を実施し，それらの関連を検討すべく計画された。精神遅滞児の乳幼児期の運動発達のおくれ・ひずみを調べることにより早期診断の手掛りを得ることが期待される。

精神遅滞児と一口にいっても，その状態像はさまざまであり，行動異常を示すといっても，自閉性を示すもの，多動行動を示すものなどがおり，このような調査の基礎として対象児童の状態像を客観的に把握することが必要である。

行動異常を捉えるためにさまざまな尺度が考えられている。しかし，自閉症児用か多動児用かのいずれかである場合が多く，尺度の選択はこのような研究では重要な課題となる。

そこで本年度は種々の尺度を検討し，本研究の目的に合致した尺度を決め，実際に調査を行ない，初期運動発達の関連から分析することを目的とした。

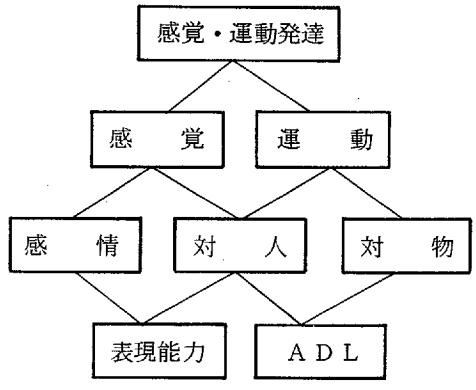
方　法

1. 評定票作成の手続き

自閉症児や多動児の諸種の評定票を筆者らの両センター職員で研究会を構成し検討した。検討したものは，自閉症児用：CLAC－Ⅱ，CLAC－Ⅲ，リムランドの診断用チェックリスト(Form E－2)，ウィングの診断手順，国立特殊教育総合研究所分室の行動特徴調査票，同分室の乳幼児の発達アンケート，また多動児用：ウェリー・ワイス・ピーターズ活動性尺度，デイビスの多動評定尺度，コナーズの活動性尺度，ベルの多動・寡動幼児に関する評定尺度，坂本らの多動行動記入表である。

これらを検討したところ，国立特殊教育総合研究所分室の行動特徴調査表は，生活能力，表現能力，対人行動，対事物行動，感覚，生活時間の各領域から構成され，異常行動を多面的に捉え得るので我々の研究に適すると判断した。しかし，項目数が多いことと，運動

図 1.　行動評価表の構成



の領域が無いという点は改訂の要ありと考え研究会，養護教育センター研究員，我々の手で項目の検討を行なった。この過程で感情行動の領域を加え，図－1に示すような構成で新たに7領域，各10項目の評定票を試作した。56年7月に予備調査を行ない表現に訂正を加えた。

これに表－1の乳児期の運動発達を調査する項目7つを加え（図－1で「感覚運動発達」と表現した）本調査の調査票を作成した。

2. 調査票の内容

表1. 初期運動発達調査項目

1. 首のすわったのはいつ頃ですか
   （　歳　ケ月頃）
2. ひとり歩き始めたのはいつ頃ですか
   （　歳　ケ月頃）
3. 歩き始めると同時に動きが急に激しくなりましたか
   a　はい
   b　いいえ
4. 手と手をからみあわせることがありましたか
   a　あった
   （　ケ月頃～　ケ月頃）
   b　なかった
5. 足を手で持って口にもっていくことがありましたか
   a　あった
   （　ケ月頃～　ケ月頃）
   b　なかった
6. 物を口にもっていくことがありましたか
   a　あった
   （　ケ月頃～　ケ月頃）
   b　なかった
7. 乳児期にはおとなしくて手がかからなかった
   a　手がかからなかった
   b　普通
   c　手がかかった

a）初期運動発達調査項目

表－1にあげた粗大運動2項目（1，2），上肢の対自己および対環境運動（4，5，6）3項目，活動性2項目（3，7）を用いた。上肢の運動（手運動）は「手－手」（4），「手－足－口」（5），「手－物－口」（6）からなり感覚運動発達の1つの指標と考えられた。

b）現症状調査項目

図－1にあげた7領域それぞれ10項目である。

A　感　覚

触覚，痛覚，前庭覚，味覚，嗅覚，視覚，聴覚に関する項目。出現時期もあわせて質問した。

例）物のにおいをかぐことがありますか，（またはありましたか）
　a　ほとんどない
　b　時々ある（あった）
　c　よくある（あった）

※　bcと答えた方はいつ頃からいつ頃までですか

B　運　動

両上肢，両下肢の運動やバランス，協調性を問う項目

C　感情行動

笑う，泣く，おびえる，奇声をあげるなど。

例）一度かんしゃくをおこすと長く続きますか
　a　続かない
　b　時々長く続く
　　（時々長く続いた）
　c　長く続く（長く続いた）

D　対人行動

eye contact，模倣，両親・他児との関係などの項目。

E　対物行動（対事物行動）

固執性，みたて遊び，ごっこ遊びなど。

F　表現能力

動作表出，言語表出，描画・書字能力など。

G　生活能力（ADL）

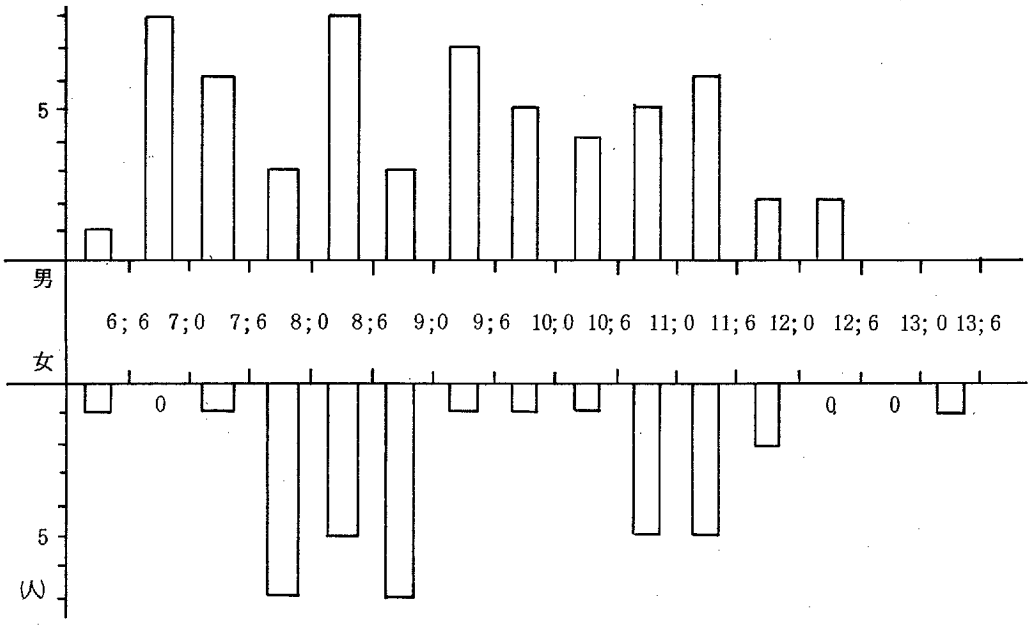
日常生活動作に関する，着脱，整容，食事などの項目。

各項目は3件法で評定した。

3. 調査方法

対象児：対象児は北九州市の精神薄弱養護学校小学部生徒167名。回収できたのは150名（90%）であり，初期運動発達項目の2段階評定までが完全に記入されているものは97名で全体の58%であった。この97名の性別年令分布は図―2に示すとおりである。

図―2. 対象児の年令分布



結　果

1. 遡及調査の結果

調査票に病名が明記されていた児童は66名，無記入の者は31名であった。4名は脳性マヒ，13名は自閉症または自閉傾向，10名はダウン症，その他の多くは精神遅滞であったが，レノックス症候群，けいれん，小頭症，心疾患などの記入もあった。

図―3は頸定の開始時期の分布を診断分類別に示したものである。自閉傾向群は4ケ月までに頸が座り，ダウン症群は6ケ月以降となっている。無記入，その他の群は4ケ月と6ケ月にピークをもつ二峯性の分布を示している。

図―4は始歩の分布を診断分類別に示したものである。自閉傾向群では18ケ月までに始歩を達成し，ダウン症群では18ケ月以降に分布している。

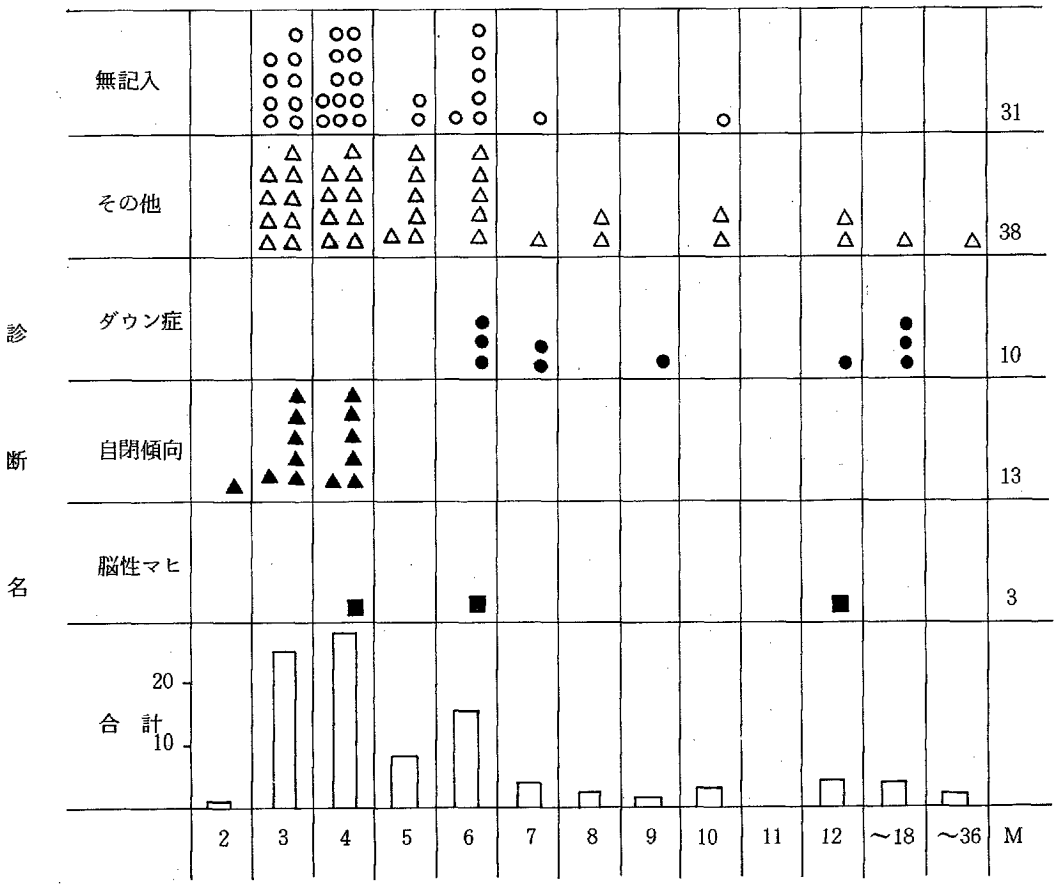
全体の分布をみると，13ケ月までと15ケ月前後，18ケ月から48ケ月までの3つに分布した。

図―5は手運動の分布を示したものである。これらの項目は5～26名が解答したのみであり，また3項目とも同じ月齢で発現したとする例もあり，解答が困難な項目と考えられる。この分布からは例数も少なく一定の結果は得られない。

2. 評定票の結果

評定票の各項目は，症状が明らかにある（C…0点），症状が少しはある（b…1点）症状はない（a…2点）として得点化し領域ごとに集計した。粗点の分布は図―6，図―7に例示した。多くの領域で正規分布は示さ

図―3. 頸定の分布



頸定の分布

ず，2峯性ないし3峯性とみなしうる分布を示した。また得点の幅も領域により異なった。

そこで，粗点から順位を求め％ile(パーセンタイル）順位に交換し，それに従って各項目のプロフィールを描いた。プロフィールから感覚と運動，感情と対人と対物の各領域がパターンを決定している傾向がうかがえたので，感覚と運動の比較と感情，対物，対人の領域との関連を調べるため次のように分類した。感覚の％ileが低いものを感覚障害型（S型），運動の％ileが低いものを運動障害型（M型）に大別した。これは感覚と運動の％ileの比較により決定した。感情，対物，対人の各領域は25％ileを含む粗点以下を－，75％ileを含む粗点以上を＋とし，それ以外を±とした。25％ile，75％ileを含む粗点を＋または－としたので，＋，－の項目の平均は25％を越えている。図―8に各領域の＋，±，－のそれぞれにS型，M型がどのように分布しているかを百分率で示した。

図―8から明らかなように，全般にS型に－が多く症状が多い傾向が認められた。特に感情ではS型の＋は皆無である。

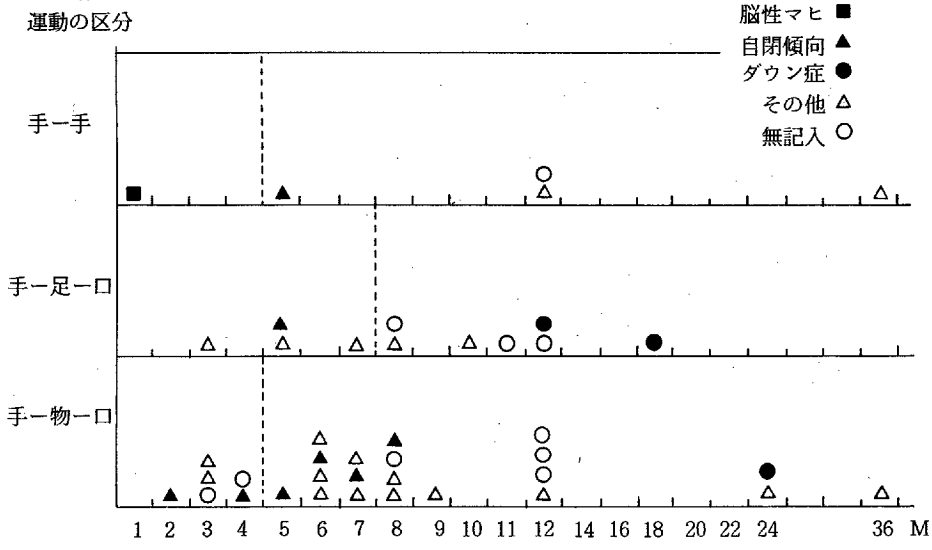
診断分類との関係を調べると，自閉傾向群13名中12名はS型，ダウン症群10名中4名がS型であった。

粗大運動の初期発達とS型，M型との関連を調べるため図―3，図―4の分布から，頸定5ケ月以下，始歩18ケ月以下を早い群として分類すると，表―2のようになった。

図―4. 始歩月齢の分布

M	4 8 12 人	脳性マヒ ■	自閉傾向 ▲	ダウン症 ●	その他 △	無記入 ○
10			▲▲		△	○
11			▲		△△△	○○
12			▲▲		△△	○○○
13			▲▲▲		△△△	○○
14						○
15			▲▲▲		△△△	○○○○
16					△	○○
17					△	○○
18			▲▲	●●		○○○
～21		■		●	△△△	○○
～24				●●●	△△△△△△	○○○
～30		■		●	△△△△	○
～36		■		●●●	△△△△	
～48		■			△△△	○○○○
～60				●		
～84					△	○
	合　計	4	13	11	38	31

図―5. 手運動の開始時期の分布



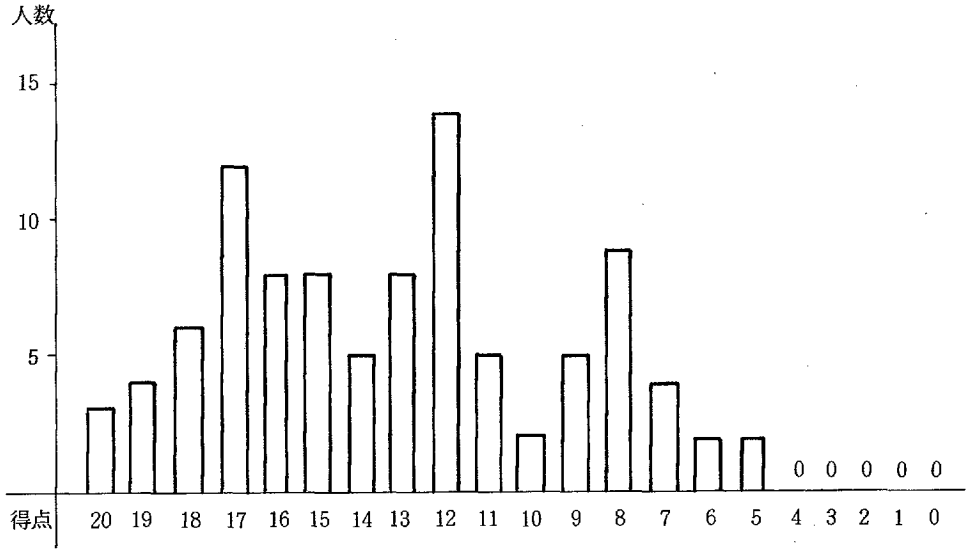
表―2. 初期運動発達と障害型の関連

	頸定5ケ月以下	頸定6ケ月以上
始歩18ケ月以下	S 26 M 17 (60.4)* (31.5)	S 1 M 6 (2.3) (11.1)
始歩19ケ月以上	S 5 M 14 (11.6) (25.9)	S 11 M 17 (25.6) (31.5)

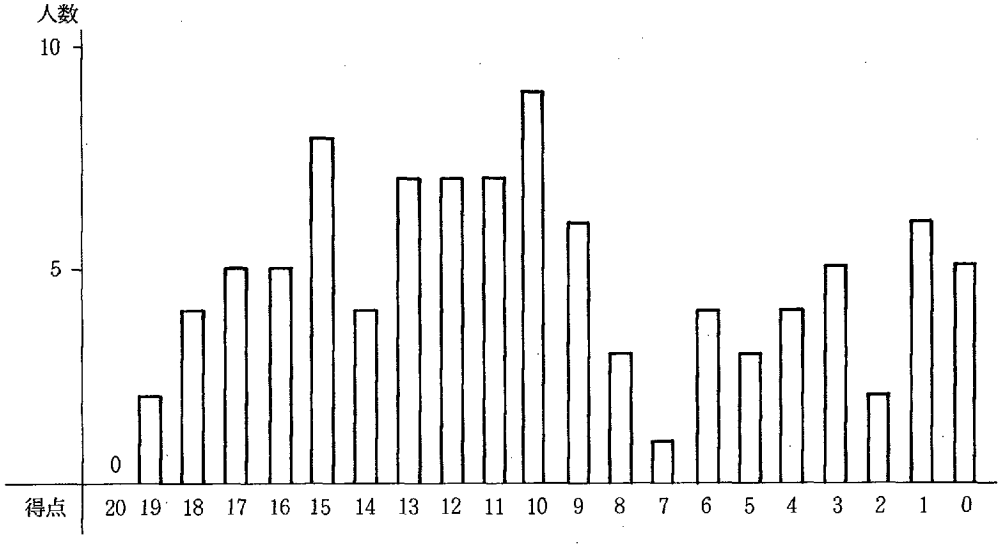
*(　)内は各型の%

初期運動発達が早い群ではS型が多い傾向がある。

図―6. 感覚得点分布



図―7. 運動得点分布



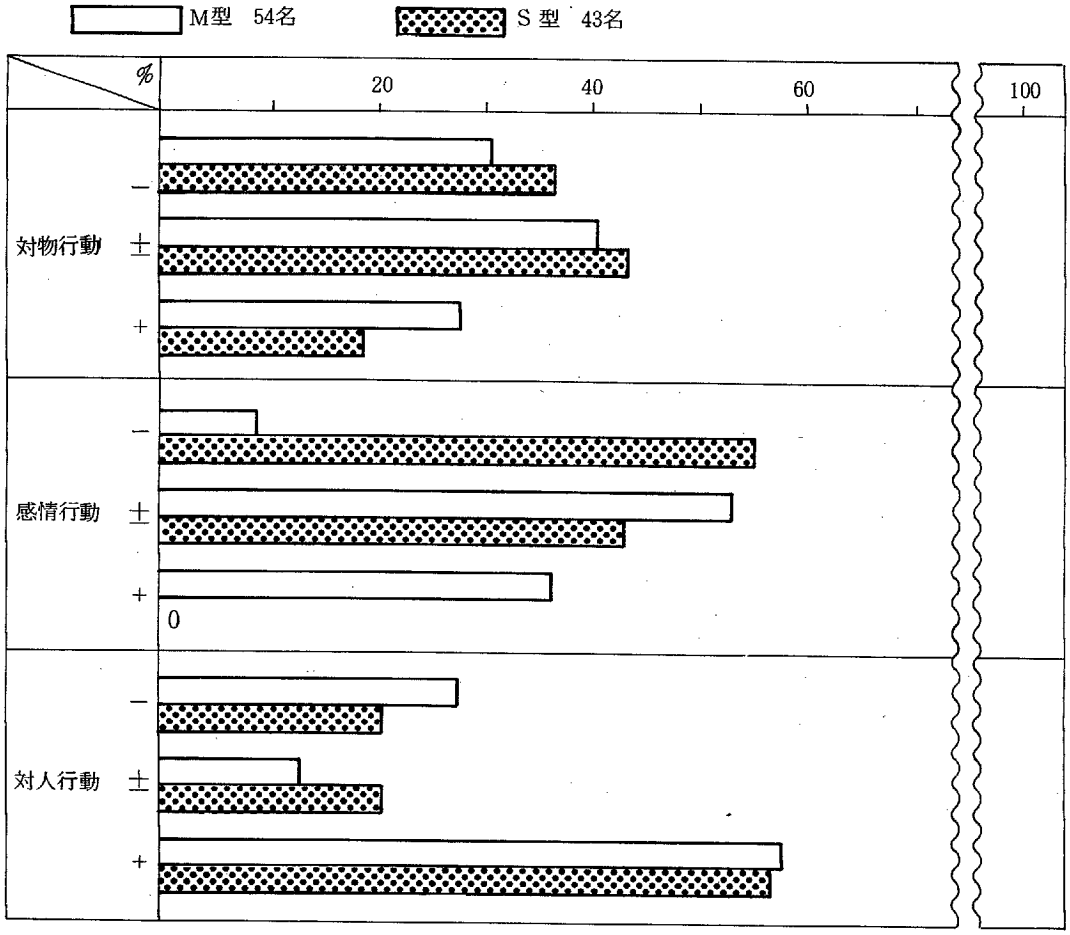
考　察

まだ分析に着手したばかりで結論としては述べられないが，結果から以下の傾向をうかがえた。

1. 自閉傾向，ダウン症の比較から，頸定4ケ月，始歩18ケ月以前に自閉傾向群が分布し，ダウン症群は頸定6ケ月，始歩18ケ月以降に分布している。
2. 感覚障害型（S型）と運動障害型（M型）の比較から，S型はより多く症状を示し（得点が低く）運動発達は早い傾向がある。

以上のことから，前年度に仮説された，運動発達に遅滞を示さない障害児の群の存在がある程度は学齢児の遡及調査でも支持されると考えられる。また，それらの子どもたちは感情，対物領域においても問題を示すことが示唆された。

図―8. サブカテゴリー別のM型S型の分布



今後，各項目間の相関を分析し領域のカテゴリーを検討した上で上記の傾向を検討し，診断名などの情報を収集し評定票の改訂を行なっていく予定である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

目的

前年度の研究の一つの結果として,発達障害児では,初期の運動発達に遅滞を示す群と遅滞を示さない群に大別され,行動に異常を示す障害児はおおむね後者に含まれるであろうことが示唆された。このことについてのより一層の分析のため今年度から本研究が開始された。

本研究においては,すでに病態像が確立された学齢の精神遅滞児を対象とし,その現在の状態像を分析するとともに,彼らの初期運動発達の遡及調査を実施し,それらの関連を検討すべく計画された。精神遅滞児の乳幼児期の運動発達のおくれ・ひずみを調べることにより早期診断の手掛りを得ることが期待される。

精神遅滞児と一口にいっても,その状態像はさまざまであり,行動異常を示すといっても,自閉性を示すもの,多動行動を示すものなどがおり,このような調査の基礎として対象児童の状態像を客観的に把握することが必要である。

行動異常を捉えるためにさまざまな尺度が考えられている。しかし,自閉症児用か多動児用かのいずれかである場合が多く,尺度の選択はこのような研究では重要な課題となる。

そこで本年度は種々の尺度を検討し,本研究の目的に合致した尺度を決め,実際に調査を行ない,初期運動発達の関連から分析することを目的とした。